『元朝秘史』におけるアムバガイ事件

―クトゥラ関与の仮説に基づいて―

The Ambaqai qahan incident in *The Secret History of the Mongols*：

Based on a hypothesis of Qotula's involvement

Mako Fujii

Abstract

According to the general understanding of Ambaqai qahan's death, the second qahan's death of the Mongol people in *the Secret History of the Mongols*, Ambaqai kahan is regarded to have been killed by betrayal of the Tatar people. And this incident is also considered as a first step in the formation of hostile emotions toward the Tatar people among the Mongols. This paper questions this view by posing the hypothesis that Qotula, Ambaqai qahan's successor, was involved in the incident. In fact, strangely enough, Ambaqai kahan left his last words to the pre-leader's son Qotula, not to his own son Qada'an. The irregularity of conveying his last request seems related to this hypothesis. Moreover, a number of incomprehensible narratives observed in the Ambaqai's incident become comprehensible if this hypothesis is accepted. In addition, the Mongols are observed to have been divided into the two groups after Ambaqai's death even though the Mongols should have been united in taking Ambaqai's revenge against the Tatar. This separation of the Mongols supports the hypothesis.

０．はじめに

筆者はこれまで四部叢刊本に基づいてモンゴルの古典『元朝秘史』（以下、秘史）についての一連の論考を著してきた（藤井　2009,2010a,2010b,2011a,2011b, 2013a,2013b,2013c,2014a,2014b）。本論の対象のジャンル規定、その取り扱う範囲、対象文献、そして分析の方法論については、藤井（2013c）に示しておいた通りである（藤井　2013c：43－44）。改めて繰り返しておくべき重要な点は、第一に、これら一連の論考においては、秘史のテキストの成立に関する諸説を一旦括弧に入れて、続集 2 巻を含めた秘史を戦略的に「連続体」すなわち「ひとつの作品」として扱ってきたことである。

第二に、第一の点と連動することなのであるが、テキストのこうした扱いを史実という側面からではなく、ひとつの言語芸術作品として扱ってきたことである。この第二の点は、筆者の研究の基礎が英雄叙事詩研究に基づいていることと深く関連している。それゆえ、一連の論考においては、常に、書かれた叙述そのものだけに焦点を当て、テキスト内部に閉じられた物語

の論理を析出することに努力を傾注してきた。そこで明らかにあった“秘史の論理”が史実とどの程度符合しているのかは今後の課題である。本論もまた、物語としての“秘史の論理”がいかなるものであったのかを明らかにする試みのひとつである。

１．本論の目的と議論の流れ

１．１．本論の目的

藤井（2010a）では、秘史の§53～§68 における物語の展開で不可解な点がいくつかあることを指摘し、その理由を、秘史において“ベルグテイの母”とのみ言及されるチンギス・カンの異母兄弟の母の出自がタタルであると仮定すると、それらが説明されうることを示した。そのさいに、1 点だけ解決されない疑問が残っていた。それは、§53 において、アムバガイ・カハンが自分の息子であるカダアンにではなく、なぜ先帝の息子のクトゥラにタタルへの復讐を命じる遺言を残したのかということである（藤井　2010a：175）。

モンゴルにおける「伝統的」婚姻儀礼においては、娘の父親は婿方に娘を見送りに行かない。モンゴルの「伝統的」儀礼におけるこうした慣習は、秘史におけるアムバガイ・カハンがタタルの乢の民による裏切りにより捕らえられたというエピソードに拠っている。そのエピソードとは、秘史の§53 において、アムバガイが自分の娘をタタル集団という婿方に見送りに行ったさいに、「タタルの乢の民」に捕らえられ金朝に移管されその後殺害されたというものである。

秘史における「タタルの乢の民」が何を意味しているのかについては検討の余地があるように思われるが[i]、本論ではこれについては保留したい。その上で、アムバガイが「タタルの乢の民」によって捕らえられタタルによって金朝に送還されて殺害された事件を核として、その前後を含めた経緯を “アムバガイ事件”と呼ぶことにしたい。むろん、ここでアムバガイ事件と呼ぶ事件は、秘史における叙述に限定して用いるものである。そのさいに、本論では、アムバガイがタタルへの復讐を代々まですることにという遺言を息子カダアンに直接伝えずにクトゥラに伝えたということに着眼したい。なぜなら、彼は自分の息子のカダアンに事件を直接に伝えさせることもできたと考えられるからである。ただし、この原文の該当箇所の解釈については異論も多いので、これについては後続の部分で改めて考察することにしたい。

本論では、アムバガイ・カハンのこうした迂回した伝達の背景には、アムバガイ事件においてクトゥラが実は関与していたのではないかという仮説を提起したい。すなわち、アムバガイ事件の明示的な叙述においては、モンゴル集団は、タタル集団の背信行為によって、アムバガイ・カハンを殺害されたことになっているが、非明示的には、モンゴル内部にタタルと秘かに通じる者がおり、それがアムバガイの後任者となるクトゥラ・カハンであったということを提示する。

本論の目的はこの仮説の妥当性を提示することである。そのさいに、まずは、この仮説を適用することによって、アムバガイ事件の全体像をよりよく理解することができることを示すことにしたい。この場合に特に注目すべき点は、アムバガイ事件におけるチンギスの父イェスゲ

イの、明示的にも唐突に見える政治的登場の意味を理解することができるようになることである。この観点とは別に、アムバガイの死後、明示的に対タタル戦争で結束しなければならないときに、モンゴル集団が分裂した状況がうかがえることを指摘し、こうした分裂はこの仮説に基づかなければ説明されにくいことを示したい。

１．２．議論の流れ

１．１．で述べた目的に沿って、まず、この１．２．では本論の議論の流れを提示しておきたい。続く２．においては考察の土台となる幾つかの考察をおこなう。本論で提起した仮説の土台となる原文の翻訳は小沢重男氏に依拠しているが、ラケヴィルツ氏のような異論もある。それゆえ、２．１．においては小沢重男氏の原文の翻訳が妥当であることを示すことにしたい。２．２．においては、アムバガイ事件を構成している秘史の§52～§59における内容を要約しておきたい。２．３．においては、２．２．で示したアムバガイ事件において見られる事件においては、仮説以外にも幾つか謎の部分があることを指摘しておく。本論の主たる考察部分となる３．においては、１．１．で述べた目的を、仮説に基づいて論じることしたい。この仮説を提起する議論の中では、２．３．で指摘しておいたアムバガイ事件における幾つかの謎も解明することができることを示す。最後に、４．においては４．１．で結論をまとめ、４．２．では本論の考察が筆者のこれまでの秘史論ともうまく接合することを示すことにしたい。その上で、４．３．においては今後の課題に言及することにしたい。

２．秘史§52～§59における明示的流れと幾つかの謎

２．１．小沢重男氏による当該箇所の翻訳の妥当性

アムバガイ事件においてクトゥラが関与したのではないかという本論の仮説の前提は、§53において、アムバガイ・カハンが自分の息子であるカダアンに直接ではなく、先帝の息子のクトゥラにタタルに復讐をするようにという遺言を残したということに置かれている。ただし、このことは小沢氏の翻訳に依拠している。実際、§53のこの箇所の翻訳については、小沢氏とは異なる翻訳をおこなっているラケヴィルツのような見解があり[ii]、もしラケヴィルツのような翻訳をするのであれば、前提は崩れることになる。それゆえ、ここでは、小沢氏の翻訳が妥当であることを示すことにしたい。まずは、この箇所について、小沢氏の見解を少し長めだが、重要なのでそのまま引用しておきたい（小沢　1984：216－217)。

鳴詁列周　亦列舌侖　ügülejü ilerün。この§53の文章のなかには三つの「舌侖 –run/rün」をもつ語があって、この三つの「舌侖」が正しく読まれていないために、従来の訳註者の本文の読み方は総て正しくないと筆者は見る。紙数を節約するために、諸家の訳文を掲げることを省略するが、従来の誤訳の原因は文中の「中忽図刺荅　鳴詁列舌論」が正しく読まれていないことに帰因する。「鳴詁列舌論」の「舌論」が読み取れないままに、この「鳴詁列舌論」を「鳴詁列」

と命令形に読む誤りをおかしている。もっとも、注意深く読まないと、上の「鳴詁列舌論」を「鳴詁列」の誤りと割り切ってでも読まない限り、この文章を曲がりなりにも訳出するのは困難である。そして「舌論」を切り捨てて読むと次のようになる。一例としてラケヴィルツ教授の訳文をあげるが、他の訳註者のそれも大同小異である。

Ambaqai-qahan contrived to give this message to the envoy Balaqachi of the Besüd: "Tell Qotula, the middle one of the seven sons of Qabul-qahan, and among my ten sons tell Qada'an-taishi the following・・・・・".このように、Qutula-da ügülerün を Qutula-da ügüle(Tell Qutula)と読んでいるのである（小沢　1984：216－217)。

小沢氏はこの箇所を次のように解釈している。

アムバガイ・カアンはベストの人バラガチを使者として「鳴詁列周　亦列舌命」≪言って遣る時に≫カブル・カンの七人の子の真中のクトラの処に、その使者を遣ったのである。そして、その使者の口を通して「中忽図刺荅　鳴詁列舌論」≪クトラに言うには≫"（私の）十人の子供の中で、カダアン･タイズに言ってくれ"と言って遣るとき（中合荅案太子荅　鳴詁列　客延　鳴詁列周　亦列舌命)、更につけ加えて"普き合罕，国の主人となって、自分の娘を、自分で送っていくのを、この私を例にして戒となせ，・・・"と云って遣わした（客額周　亦列主兀）のである。即ちアムバガイの言葉としてクトラに語られたのは二部に分かれ、最初は≪十人の中のカダアンに言え≫であり、次が≪普き合罕・・・≫ということになる（小沢　1984：217)。

以上の小沢氏の論点を整理して述べるなら次のようになる。翻訳には 2 通りがあり、ひとつは、アムバガイの遺言をバラガチという使者を通じてクトラに伝えさせたとするものと、もうひとつはクトラとカダアン両者に伝えさせたとするものである。前者の場合、アムバガイの遺言をクトラからカダアンに伝えさせようとしたことになる。小沢氏によると、前者の翻訳を採っているのは小沢氏ひとりで、それ以外はラケヴィルツの翻訳と同じようなものになっているという。筆者はこの場合、小沢氏と同じ立場を採ることにしたい。小沢氏が指摘するように、少なくともラケヴィルツの翻訳では「舌論」を切り捨てて読んでいるからである。

重要なのは、本論で、後者の読み方をするのであれば、本論の仮説は成立しないという事情がある。ただし、小沢氏は同じ箇所で、クトラに語られた理由を、「アムバガイは次期合中罕として信望の厚いクトラを通してわが子カダアン･タイズに己の万斛のうらみの報復を命じたのである」としているが、本論では全く異なる解釈を与えている [iii]。これについては、以下の考察を参照されたい。

２．２．秘史§52～§59 における明示的流れ

前述したように、本論でいうところの"アムバガイ事件"とは、アムバガイがタタルの乢の

民によって捕らえられ、タタルによって金朝に送還されて殺害された事件を中心に、その前後を含めた経緯を含んでいる。具体的に言えば、“アムバガイ事件”は、アムバガイがタタルの乞軍によって金朝に送られて殺害される§53を中心として、その前節の§52からイェスゲイ・バアトルがタタル戦に参加していたことに言及される§59を含んでいる。まずは、秘史の明示的な流れを節ごとに要約しておく（表１）。なお、表中においては、重要な人物名はゴシック体にし、重要な出来事は点線を付してある。

表１：『元朝秘史』の巻１§52～§59における概要

当該節	概要
§52	全モンゴルをカブル・カハンが治めていたこと、カブル･カハンの後継者はカブル･カハンの言葉によってセングン・ビルゲの子**アムバガイ**が全モンゴルを治めたということが叙述されている。
§53	**アムバガイ**はアイリウド・ブイルウド・タタル集団に自分の娘を与えるために自ら娘を送りにいったこと、その途中で、「タタルの乞の民」がアムバガイを捕らえて金国皇帝に献上するために連れて行ったこと、アムバガイは使者をカブル・カハンの7子の真ん中のクトゥラにやり、自分の10人の子供の中のカダアン・タイズにタタル集団に自分の恨みを晴らすように伝えさせる。
§54	イェスゲイが鷹狩りをしていたときに、メルキト集団のイェケ・チレドという人物がオルクヌウド集団から娘ホエルンを娶って道中を行くのを目撃し、ホエルンが美貌であることを知り、自分の家に帰って兄と弟を引き連れてくる。
§55	イェケ・チレドはイェスゲイたちを見て怖れる。ホエルンはイェケ・チレドの命を助けるために逃げるように薦め、チレドは逃亡する。
§56	ホエルンがイェスゲイの家に連れてこられる。
§57	**アムバガイ･カハン**が**カダアン、クトゥラ**二人を名指したことにより、全モンゴルとタイチウドは、オナン河のコルコナグ渓谷に集ってクトゥラをカハンに推戴した。
§58	クトゥラがカハンになった後、カダアン・タイズとタタル集団に出撃し13回戦ったがアムバガイの仇を取ることができなかった。
§59	イェスゲイがタタル集団のテムジン・ウゲ、コリ・ブカを略奪して帰ってくると、ホエルンが妊娠していた。そしてオナン河のデリウン・ボルダグにいるときに、チンギスが生まれた。タタル集団のテムジン・ウゲを連れてきたときに生まれたので、幼名をテムジンと名づけた。

２．３．秘史§52～§59における明示的流れにおける幾つかの謎

表１で記した内容に基づくと、以下のようなa～dまでの４つの謎を指摘することができる。

a. モンゴルの皇帝位がカブル・カハン、アムバガイ･カハン、クトゥラ・カハンと継承されているが、その継承パターンが単純な父―息子のラインではなく、カブル･カハンからアムバガイ･カハンに継承するときと、次にアムバガイ･カハンからクトゥラ･カハンに継承するときに屈折していること。

b. アムバガイ･カハン事件と一見異なるイェスゲイの婚姻エピソードがこの事件の中に織り込まれていること。

c. イェスゲイの対タタル戦でのクトゥラ･カハンやカダアン･タイズとの連携が明示的に記され

ていないこと。

d. 原文においては、アムバガイを裏切ったのは「タタルの乢の民」だと叙述されている。すなわち、アムバガイと婚姻関係を結ぼうとしていたタタル集団を明示的に指していないといえる。このことはタタルを宿敵とする秘史の明示的な叙述を弱めることになっているように思われる。これはなぜなのかということ。

e. イェスゲイが皇帝になったのか否かが明示的に不明確であること。

以下においては、a～e までについて詳細に見ていきたい。

a. 皇帝位の継承パターンからみたアムバガイ･カハンの変則性

ここにおいては、①カブル･カハン、②アムバガイ･カハン、③クトゥラ・カハン、④チンギスの父イェスゲイの順に、アムバガイ事件と関連のある主要関係者が系譜上どのような関係にあるかを確認しておく。まず、カブル･カハンは秘史§52 おいてモンゴル集団の初代の皇帝カハンとして記されている。これに対して、アムバガイ･カハンは§47 によると、カブル・カハンの父トンビナイ・セチェンの父バイ・シンコル・ドクシンの弟チャラカイ・リンクの子供のセングン･ビルゲの息子である。§57 でモンゴルの第 3 番目のカハンとなったというクトゥラは、§48 に従うと、カブル・カハンの第 4 子に当たり、イェスゲイは、§48 と§50 に従うと、カブル･カハンの第 2 子バルタン･バアトルの第 3 子に当たるので、カブル･カハンの系統だということになる。つまり、イェスゲイとクトゥラはともにカブル･カハンの系統で、その祖先はバイ・シンコル・ドクシン筋の系譜に当たる。これに対してアムバガイは、このバイ・シンコル・ドクシンの弟チャラカイ･リンク筋の系譜ということになる。これを見ると、イェスゲイは、アムバガイではなく、クトゥラと系譜上近いといえる。

つまり、皇帝位の継承ラインは、①カブル･カハン（初代）→②アムバガイ・カハン（第２代）においては、バイ・シンコル・ドクシン系からその弟のチャラカイ･リンク系に移動し、②アムバガイ・カハン（第２代）→③クトゥラ・カハン（第 3 代）においては、反対に、チャラカイ･リンク系からバイ・シンコル・ドクシン系に動いているのである。バイ・シンコル・ドクシン系とチャラカイ・リンク系のどちらのラインが正統なのかという点については、秘史で記された系譜を辿ると、バイ･シンコル･ドクシン系のカブル･カハンの系統のほうが正統である。なぜなら、秘史で記された系譜とはチンギスに連なる系譜のことであり、チンギスに連なる系譜の祖は実質的にボドンチャルに遡るのであるが、ボドンチャルの系譜は常に長男筋が系譜の中心を占めていくことが観察されるからである。

イェスゲイが③クトゥラ･カハンの次のカハンになったとは秘史には明示的に書かれていないが、イェスゲイ亡き後にイェスゲイの妻ホエルンがアムバガイの妃と口論をしている§70～§71 を考慮に入れると、ある程度モンゴル集団の中で政治的力を持っていたことがうかがわれる。これを重視してイェスゲイの系譜を見ると、彼は③のクトゥラ・カハンと同じ系統のバイ・シンコル・ドクシン筋だということになる。すなわち、初代のカブル･カハンからイェスゲイま

でをみたときに、アムバガイは王位継承ラインとして変則的だということがわかる。アムバガイのカハン位継承は明示的にカブル･カハンの意向によってと叙述されているのであるが（表１§52）、なぜこうした変則的な継承がなされることになったのかという疑問は生じる。

b. アムバガイ事件とは異質なイェスゲイの婚姻エピソード

表１におけるアムバガイ事件の叙述は、チンギスの父イェスゲイの略奪婚のエピソードを含んでいる。イェスゲイの略奪婚をどう考えるのかという点についてはすでに拙稿（藤井　2010a）で論じたので、ここでは結論だけ述べておく。拙稿では、イェスゲイの正妻がタタル集団出身者だったことが政治的に不利になり、イェスゲイはこの婚姻をやり直そうとした可能性があるとした。具体的に言うと、イェスゲイは、メルキト集団から「奪い返す」という形でチンギスの異母兄弟である“ベルグテイの母” という正妻を第二夫人にし、チンギスの実母ホエルンを正妻にすげ替えたということである。しかし、拙稿の段階においては、アムバガイ事件との関連を考察していなかったので、このアムバガイ事件との整合性をはかる必要性があるように思われる。

c. イェスゲイと、クトゥラ・カハンやカダアン・タイズとの関係性の不明瞭さ

明示的な政治的状況からみると、イェスゲイがモンゴル集団の一員としてクトゥラ･カハンやカダアン・タイズと一緒に対タタル戦を戦っていたと考えるのが妥当であろう。たしかに、§59において「イェスゲイ・バアトルが、タタル集団のテムジン・ウゲ、コリ・ブカ頭とするタタルを略奪して帰ってくると」というような叙述があるので、そのように読める。しかしその行為がクトゥラ･カハンやカダアン･タイズとどのように関係しているのかは明示されていないのである。ここには、イェスゲイが対タタル戦において、クトゥラ･カハンやカダアン･タイズと連携したことがなぜ明確に書かれなかったのかという疑問を生じさせている。

d. アムバガイ事件へのタタルの関与性の不明瞭さ

アムバガイ事件とは、モンゴルの皇帝がタタル集団に嫁をやる途上に起きた事件で、その姻族になるタタル集団に裏切られる事件を扱っている。ここで注意が必要なのは、モンゴルとタタルは婚姻関係を結ぶという関係にあったということである。これを重視して原文をよく見ると、その姻族になるタタル集団が直接アムバガイを金朝まで連行したのではなく、「タタルの乢の民」がアムバガイを捕らえて金皇帝に連行したのだと叙述されている。つまり、実際のところ、姻族であるタタル集団がどれくらい関与したのかは不明瞭と言わざるをえない。重要だと思われるのは、「タタル」ではなく「タタルの乢の民」と表現することによって、モンゴルのタタルに対する宿敵観の正当性を弱めることになっていることである。

e. イェスゲイの最終的な政治的位置の不明瞭さ

最後に指摘したいのが、イェスゲイが最高権力者であるカハンになったのか否かが明示的に示されていないことである。つまり、イェスゲイの政治的位置はいかなるものであったのかが明示的には何も記されていないと言える。これを知る手がかりとして、栗林均編（2009）に依拠してイェスゲイの称号を表２に整理して示すことにしたい（栗林　2009：527）[iv]。

表２：『元朝秘史』におけるイェスゲイの出現箇所における称号

No.	表現形式	回数	出現箇所	備考
1	Yisügei	1	01:38:04（§56),	§56 については表１参照。
2	Yisügei_aqa	1	02:01:03（§69）	
3	Yisügei _ba'adur	1	04:07:05（§130）	
	Yisügei _ba'atur	14	01:31:03（§50），01:34:04（§54），01:36:10（§56），01:40:05（§59），01:41:04（§60），01:42:01（§61），01:42:09（§62），01:47:01（§66），01:47:09（§67），01:48:08（§68），02:01:02（§69），02:01:10（§70），03:17:07（§111），04:28:08（§140）	§54，§56，§59 については表１参照。
4	Yisügei _ba'atur _anda	1	05:35:07（§164）	オン･カンがチンギスにイェスゲイとチンギスが自分を助けてくれたことに感謝する言葉の中で。
5	Yisügei _Kiyan	1	01:48:01（§67）	
6	Yisügei _qa'an	1	05:09:06（§150）	
7	Yisügei _qan	5	05:09:07（§150），05:10:01（§150），05:10:01（§150）[v]，05:11:08（§151），06:25:05（§177）	§150 はイェスゲイがケレイトのオン･カンとアンダになった経緯が説明される節。
8	Yisügei _qan_ečige	6	02:39:04（§96），03:04:07（§105),05:36:09（§164），06:24:07（§177），06:24:09（§177），06:26:09（§177）	§96 ではケレイトのオン･カンにチンギスがクロテンの衣を贈呈しに行くときに父イェスゲイがオン･カンとアンダだったからと述べる中

				で。§105はケレイトのオン・カンの言った言葉を繰り返している部分で§96 と同様の内容。§164 ではオン・カンが老いたことを理由にチンギスと父子の誓いをなしたという話の中で。§177は§150の内容と重複。
9	Yisügei _quda	4	01:42:08（§ 62），01:43:05(§63), 01:43:10(§63),01:45:08(§65)	
計		35回		

表２をみると、イェスゲイの称号として着目されるのは、3 番の ba’atur（ba’adur の 1 例を含む）の 15 例、3 番と同じ系列の 4 番の Yisügei _ba’atur _anda の 1 例、6 番の Yisügei _qa’an の 1 例、7 番の Yisügei _qan の 5 例、7 番と同じ系列の 8 番 Yisügei _qan_ečige の 6 例である。すなわち、頻度順に言えば、ba’atur 系列の称号が 16 例、qan 系列が 11 例、qa’an の称号が 1 例現れていることになる。つまり、秘史においてイェスゲイの称号は一定しておらず、これは彼の政治的位置が流動的であったことを示唆しているといえる。

アムバガイ・カハン、クトゥラ･カハンとの関連でいえば、当然、qa’an の称号に着目したいが、イェスゲイに関していえば、この称号は秘史においては 1 例しか登場しない。この 1 例については既に拙稿で考察しているように（藤井　2014a：60－61）、イェスゲイの称号だけではなく、王罕やチンギスの称号との関係でみなければならない。なぜなら、qa’an の 1 事例は§150 に現われるが、その前後に現れる王罕やチンギスにも同様の qa’an の称号がついていることが観察されるからである（藤井　2014a：61）。この考察は、イェスゲイのこの qa’an 称号については、単独に論じることができないことを示している。

表 2 から明らかなように、イェスゲイの称号で事例数が一番多いのは ba’atur であるが、qan という称号の出現も ba’atur ほどではないとはいえ侮れない出現数といえる。ここで注目するべきことは、本論で論じているアムバガイ事件に関わる§52～§59 におけるイェスゲイの称号には qan という称号は見受けられないことである。qan という称号は、常にケレイト集団の王罕の出現する文脈で現われている。この事実は何を意味するのかという問題がここには横たわっているといえる。

３．アムバガイ事件の非明示的内容

３．１．アムバガイ事件におけるクトゥラの役割についての仮説

本節においては、いよいよ、アムバガイ事件の核心の考察に移りたい。問題の焦点は、§53でアムバガイが、カブル･カハンの七子のうち真ん中のクトゥラに、「我が十人の子供のなかのカダアン・タイズに告げよ」と言って、タタルに対して復讐を果たすように遺言することにある。すなわち、アムバガイが直接自分の息子のカダアン･タイズに言わず、カブル・カハンのクトゥラを経由させて伝えさせる意図である。この意図について本論で提起したいのが、クトゥラがアムバガイ事件において秘かにタタルと通じていたのではないかという仮説である。

むろん、この仮説には次のような反論もできる。それは、アムバガイがクトゥラに裏切られたのであれば、まずは自分の息子カダアンに真相を伝えるのではないかということである。しかし、もしそうした場合には、カダアンはタタル征伐に向かうよりも父アムバガイを裏切ったクトゥラへの復讐に向かうのではないかと推測される。そのようになれば、モンゴル集団における同族争いが勃発し、タタル集団への復讐は遠のくことになる。こうしたモンゴル集団における同族争いは、しかし、タタル、ひいては金朝皇帝にとって好都合な状態となる。アムバガイ・カハンはこうしたことを予測したうえで、クトゥラへの復讐心を封印し、タタル集団への復讐を完遂させようとしたのではないかと考えられる。

とはいうものの、アムバガイはクトゥラという裏切り者の存在がいることを息子カダアンに伝えておきたいとも思ったであろう。アムバガイは、クトゥラからカダアンへ遺言を伝えさせるという不自然な方法を取ることにより、この不自然な方法の意味を考えさせるという形でカダアンに事の真相を伝えようとしたのではなかろうか。実際、ときのモンゴル皇帝を陥れようとしたクトゥラという人物がいたこと、そしてその人物を後押しする勢力がいたことを考えると、アムバガイは自身の亡き後、クトゥラの勢力が自分の勢力を凌駕することを見込んでいたのであろう。実際、アムバガイの後継者となったのがクトゥラであったことを考えると、アムバガイの予測は確かに現実的なものであったといえる。

アムバガイの息子カダアンの立場にたてば、なぜ父親が自分ではなく先帝の息子クトゥラに遺言を残し、その内容を間接的に自分に伝えさせたのかという真意を探るであろう。この奇妙な遺言の残し方の意味するところを、実際、カダアンは推測したことがうかがわれる。なぜなら、アムバガイの処刑が叙述される§53 の後の§57 において、カダアンについては直接的な言及がないものの、クトゥラをカハンにしたという叙述が見えるからである。アムバガイが金朝へ送られて処刑されたことをみると、この叙述の段階において、クトゥラ勢力には最終的な後ろ盾として大国の金朝が存在しているため、父アムバガイを殺害されたカダアンが父アムバガイから王位を引き継ぐことはできなかったことは不思議ではない。

一方、アムバガイの立場に立てば、アムバガイは息子カダアンに自分を裏切ったのがクトゥラであることを伝えるとともに、クトゥラをアムバガイの後任に推戴させるようにし、その上

でクトゥラをカダアンと共にタタル征伐をさせることに成功したことになる。そして、その意図は、アムバガイの後継者として、裏切り者のクトゥラをカハンに据えた上で、クトゥラの実際には味方であるタタルへの討伐を行わせることにあった。これがアムバガイのクトゥラへの念入りな復讐の筋書きであった。

表向きクトゥラはアムバガイと味方関係にあるのでタタル征伐に行くことになったが、それは、クトゥラをタタルとの間、ひいては金朝との間における亀裂を引き起こさせるに充分なものであったはずである。クトゥラは、一見首尾よくアムバガイの後任カハンに即位したものの、タタル征伐を条件に成立したことをかんがみると、クトゥラ政権は成立した時点ですでに機能不全に陥っていたと考えるべきであろう。アムバガイは、短い遺言ひとつ残した時点で裏切り者のクトゥラに一矢を報いたといえるのである。

死を前にして異彩を放つこうしたアムバガイの政治手腕を重視すると、アムバガイがカブル・カハンの継承者になった理由はそれなりに理解されうるものとなる。カブル・カハンには 7 人の息子がいたにもかかわらず、センゲン・ビルゲの子であるアムバガイを後継者と指名したことが§47 に明示的に示されている。つまり、アムバガイの描いたクトゥラへの鮮やかな復讐計画は、アムバガイの生前の辣腕さを推測させるに充分なものである。アムバガイの目的は、ひとまずはクトゥラを推戴してから、タタル征伐に行かせることで窮地に立たせ、その後釜に自分の息子カダアンを据えることであった。

とはいえ、アムバガイの復讐計画には誤算がひとつあった。それは、クトゥラの後任として計画したカダアン・カハンが成立するかどうかという問題であった。アムバガイの希望的観測とは異なり、カダアンには手柄を立てる力がなかったことが、§58 において明示的に記されている。§58 は短いので全文を挙げておこう（栗林均・确精扎布 2001:44,小沢　1984：243）。ただし、訳語は若干変えたことを断っておく。

クトゥラはカハンになってから、カダアン・タイズの二人はタタル集団に出陣した。タタルのコトン・バラガ、ジャリ・ブカ二人に十三回戦い合ったが、アムバガイ・カハンの恨みをとり、うらみに報いることができなかった。Qutula qahan bol=u=at Qada’an_taisi qoyar Tatar_irgen-tür morila=ba. Tatar-un Kötön_Baraqa ǰali_Buqa [vi] qoyar-tur harban qurbanata qatqu[l]du=ǰu Ambaqai_qahan-nu ösöl ösön kisal kisa=n yada=ba.

§59 のような短い文章で決定的に示されていることは、アムバガイ・カハンの後任者として、クトゥラもカダアンも失墜したということである。こうして権力の空白が生まれたときに登場してきた人物、それがチンギスの父イェスゲイであった。

３．２．　イェスゲイ・バアトルの政治的台頭

§58 のすぐ直後の§59 での冒頭では、「そしてイェスゲイ・バアトルが、タタル集団のテム

ジン・ウゲ、コリ・ブカ頭とするタタルを略奪して帰ってくると tende Yisügei_ba'atur Tatar-un Temüǰin_Üge Qori_Buqa teri'üten Tatar-i dawli=ǰu ire=esü」というように（小沢　1984：245，栗林均・确精扎布　2001：44）、チンギスの父イェスゲイ・バアトルが対タタル戦で手柄を立てたらしいことが叙述されている。「らしい」と表現するのは、「略奪して帰ってくると」という表現は曖昧だからである。この表現は、タタル戦で功績を立てたという表現とも読めるし、また、単に、文字通り、タタル集団に行って略奪行為をはたらいただけにも読めるからである。しかし、重要なことは、§58 と§59 の接続の仕方である。ここには、モンゴル集団における権力の空白が生まれていたこと、そして、その空白に躍り出ようとしていたのがチンギスの父イェスゲイ・バアトルであったということが暗示されていることである。

§59 におけるイェスゲイの権力への志向を考慮に入れると、アムバガイがタタル集団に殺害された§53 に後続する§54 でイェスゲイ・バアトルがオルクヌウド集団のホエルンを略奪するエピソードの解釈も若干変わってくることになる。拙稿においては（藤井　2010a：173－175）、このエピソードを、モンゴルとタタルとの関係が悪くなったために、イェスゲイがタタル集団出身の正妻をそのまま正妻にしておくことは政治的に難しくなったことに関連付けた。確かに、その解釈には大きな誤りはないものの、イェスゲイのホエルン略奪事件の背景に、とくに積極的な理由を見出していなかった。

しかし、§58 から§59 の接続を考慮に入れると、イェスゲイには積極的な理由があったと見るべきであろう。すなわち、アムバガイの遺言から、クトゥラとカダアンがアムバガイの後継者となることが予想されたが、クトゥラがたとえカハンになったとしても、最初から死に体の王権であることは充分に予想されていた。しかも、表 1 の§58 で見たように、クトゥラ･カハンとカダアンは対タタル戦に何度も出かけたにも関わらず、仇を討てなかったことが明示的に叙述されているのである。

イェスゲイはこうした情勢の中で権力を志向したものと考えられる。だからこそイェスゲイは自分の正妻をタタル以外の集団の女性とすげ替えようとする挙動に出たと考えられるのである。実際、このように考えると、§54 のアムバガイの死から§55 のイェスゲイのホエルン略奪事件との関連がよく理解される。§54 のアムバガイの死とイェスゲイのホエルン略奪事件とは明示的に無関係な事件にも関わらず、イェスゲイは§55 で唐突に姿を現しているのである。それゆえ、イェスゲイによるホエルン略奪事件が、アムバガイの事件とその波紋を叙述する一連の出来事のなかで叙述されている意味は、偶然ではなく、必然的な政治的な出来事だということになる。イェスゲイもまたアムバガイに劣らず政治的に動ける人物であったといえる。

以上の議論をまとめると、アムバガイ事件後のモンゴル集団の実質的リーダーは流動的で、クトゥラ、カダアン、イェスゲイの三つ巴であったらしいことが理解される。その三者のなかでクトゥラは確かにカハンとはなったが、その権力の基盤は盤石なものではなかった。そのことは前述のように、イェスゲイの亡き後、§71 と§72 の祖先崇拝におけるイェスゲイの正妻ホエルンとアムバガイ・カハンの二人の后との間の口論にクトゥラに一言も言及されないこと

に表れているように思われる。

イェスゲイとクトゥラがどのような関係にあったのかが秘史の明示的な叙述からは明らかではないことも、クトゥラがアムバガイの知られざる裏切り者であったという本論の仮説に沿うものである。イェスゲイがクトゥラと密接な関係にあったことがもし明示的に記されているならば、イェスゲイはアムバガイ殺害の一端を担いだことになり、逆賊のそしりをまのがれなくなるであろう。秘史においては明示的にはチンギス一家を肯定的に描き出されなければならなかったことを考慮に入れると、クトゥラとイェスゲイの関係が曖昧にしか描かれていないことは意味のあることなのである。

クトゥラとの関係だけでなく、イェスゲイがアムバガイとどのような関係にあったのかも明示的に書かれていない。明示的な叙述に基づくなら、彼はアムバガイとも無関係に政治的に台頭してきたかのように描かれているのである。クトゥラがアムバガイ殺害に関与していたという仮説に従えば、イェスゲイは、クトゥラ側ともアムバガイ側とも表立った敵対関係にはならないようにしつつ、タタルを敵とすることによって、モンゴル集団を維持あるいは再構築しようとしたものと考えられる。それによって、集団を分裂によって弱体化させることなく統合し、自らその権力の頂点に立とうとしたと考えられるのである。このように考えると、タタル集団がモンゴル集団の「宿敵」となったのは、アムバガイの死に関与したことに起因するというよりも、集団の分裂を避けるためタタルを宿敵にしようとするアムバガイの意志、そしてその遺志を継いだイェスゲイの意志に起因するものだということになる。

拙稿の議論に従えば（藤井　2010a）、タタル集団はもともとイェスゲイの正妻の出身であったので決して敵ではなかったはずであるが、イェスゲイの政治的決断によってその婚姻を否定されたので―別集団のホエルンを正妻に据えるということはこれを意味する―、タタル集団はイェスゲイを毒殺するという復讐を果たす。この展開をみれば、イェスゲイの政治的野心がなければ、イェスゲイがタタル集団に殺害されることもなかったかもしれないということになる。

３．３．系譜からみたアムバガイ・カハンの位置―全モンゴルの分裂―

２．３．のａで述べたように、アムバガイの王位継承は変則的なものである。当然ながら、アムバガイに対する批判があった可能性は高い。これはクトゥラがタタルと秘かに通じてアムバガイを抹殺しようとしたのではないかという仮説の背景にもなっている。アムバガイ事件の後、モンゴル集団には明らかに亀裂が入ったものと考えられる。そして、この亀裂は、実際には、モンゴル集団がモンゴルとタイチウドに分かれたというよりも、モンゴルという集団から反クトゥラ派がタイチウド集団となって離れ、タイチウド集団以外の人々をモンゴルというようになったプロセスと捉えることができる。

このことは、§52 の内容と、§57 の内容を比較することによって明らかである。

§52 は短いので全文を引用しておこう（小沢　1984：212，栗林均・确精扎布　2001:36）。ただし、日本語訳は小沢訳をもとにしながら若干変えたところがあることを断っておく。

全モンゴル qamuq Mongqol をカブル・カハンが支配した。カブル・カハンの後は、カブル・カハンの言葉によって、自分の七人の子がいながら、センゲン・ビルゲの子**アムバガイ・カハンが全モンゴル qamuq Mongqol を支配した**（qamuγ Mongqol-i Qabul_qahan mede=n a=ba. Qabul_qahan-nu qoyina Qabul_qahan-nu üge-ber dolo'an kö'üd-iyen bö'e=tele Senggüm_Bilge-yin kö'ün Ambaqai_qahan qamuq Mongqol-i mede=n a=ba）。

これに対して、§57 は、アムバガイ・カハンが殺害された後、クトゥラがカハンに推戴されたことを祝う叙述である（小沢　1984：240，栗林均・确精扎布　2001:44）。上記と同様、ここでも日本語訳は小沢訳をもとにしながら若干変えたところがあることを断っておきたい。

アムバガイ・カハンが、カダアン、クトゥラ二人を名指し来たことによって、**全モンゴル qamuq Mongqol とタイチウドは**オナン河のコルコナグ渓谷に集まって、クトゥラをカハンになした。モンゴル人の喜悦は、踊り跳ね、宴を張り、楽しむのであった（Ambaqai_qahan-nu Qada'an Qutula qoyar-i nereyit=čü ilē=kse'er qamuq Mongqo[l] Tayyiči'ut Onan-nu Qorqonaq_ǰübur qura=ǰu Qutula-yi qahan bolqa=ba. Mongqol-un ǰirqalang de[b]se=n qurimla=n ǰirqa=qu bü=le'e.）。

§52 において、カブル・カハンもアムバガイ・カハンも全モンゴル qamuq Mongqol を治めたとあるが、アムバガイ・カハンの次のクトゥラの推戴のさいには、全モンゴル qamuq Mongqol とタイチウドが推戴したとある。これをみると、この 2 つの節の間で、全モンゴル qamuq Mongqol の語で表わす内容は明らかに異なっている。すなわち、カハンの治める集団が、§52 の全モンゴル qamuq Mongqol から、§57 の全モンゴル qamuq Mongqol とタイチウドに変化しているのである。

ここで、後者の§57 に登場するタイチウドは、アムバガイ事件よりも前の§47 でアムバガイの子孫たちがタイチウドになったという叙述、及び、アムバガイの息子カダアンとクトゥラ・カハンが共に対タタル戦に行ったとある§58 の 2 つの叙述に基づけば、タイチウドが全モンゴル qamuq Mongqol に付け足された新たな集団ではないことは明らかである。すなわち、§52 の全モンゴル qamuq Mongqol と§57 の全モンゴル qamuq Mongqol は表現として同一であるが、その意味する集団の範囲は異なっていると理解せざるをえない。本論では、この全モンゴル qamuq Mongqol の意味の違いを考慮せずに、すべて“モンゴル集団”と訳してきたが、実は§57 を境にその意味する範囲は違うことになる。

全モンゴル qamuq Mongqol の意味の変化を考える場合、アムバガイ事件におけるクトゥラの裏切りという仮説と結び合わせて理解する以外に説明できないように思われる。なぜなら、アムバガイがタタルの裏切りによって殺害されたのであれば、モンゴル集団はタタルに対して

結束しなければならない事態であるはずなのに、逆に分裂しているからである。アムバガイの殺害にクトゥラが関与しているのであれば、この分裂は説明しうるものとなるのである。つまり、クトゥラは表向きアムバガイの後継者とはなったが、これに敵対するかのようにアムバガイの子孫たちは反クトゥラ派として“タイチウド”という集団を新たに形成したと考えられるのである。これが上記の全モンゴル qamuq Mongqol から、全モンゴル qamuq Mongqol とタイチウドへ変化したことの意味なのであろう。言い換えれば、アムバガイ以降の全モンゴル qamuq Mongqol は、反クトゥラ派（アムバガイ派）が抜けて小さくなった集団だといえる。そして、全モンゴル qamuq Mongqol から反クトゥラ派を除外したこの新たなる全モンゴル qamuq Mongqol だけが、おそらく実質的にクトゥラのカハン位襲名を歓迎したのであろう。

むろん、アムバガイ派であるタイチウド集団の出現をアムバガイ・カハン自身は全く望んでいなかった。アムバガイ派のタイチウド集団が出現することは、モンゴルの力が削がれる結果を招くことをアムバガイは見通していたと考えられるからである。アムバガイだけではない。こうした全モンゴル qamuq Mongqol の亀裂を避け、なんとかアムバガイの治めていた諸集団を引き継ぐ方法を模索しようとしていたのがチンギスの父イェスゲイであったといえる。クトゥラがカハンになった後、クトゥラはアムバガイの子カダアン・タイズと一緒にタタル戦に挑むがアムバガイの仇を取れないときに、イェスゲイは対タタル戦争が躊躇なく行えるように自らの正妻をタタルからオルクヌウトに変えようとしていたのである。この行為は、アムバガイ時代のような全モンゴルを目指していたことを示している。

４．結論と今後の課題

４．１．結論

本論の考察をまとめると次のようになる。まず、本論の前編ともいえる藤井（2010a）では、秘史の§53～§68 における明示的には不可解な物語の展開を指摘し、その理由を、秘史において“ベルグテイの母”とのみ言及されるチンギス・カンの異母兄弟の母の出自がタタルだと仮定すると説明しうることを示した。そのさいに、ひとつ残された疑問が、§53 において、アムバガイ・カハンが自分の息子であるカダアンに直接ではなく、先帝の息子のクトゥラにタタルへの復讐を告げる遺言を残した理由であった。本論では、この理由として、アムバガイ事件においてはクトゥラが実は関与していたのではないかという仮説を提起し、その仮説の妥当性を提示することに努めた。ただし、本論の考察においては、原文の該当箇所すなわち§53 における「中忽図刺荅　鳴詁列舌論」の「舌論」の解釈については異論も多いので、小沢氏の翻訳に依拠することの妥当性を強調しておくことから考察をはじめた。

本論での目的は直接的には以上のようなアムバガイの遺言の仕方の変則性の理由を解明することであるが、実際には、この問題は、当該箇所の§53 のみを検討しても解決しえないため、アムバガイの死を含む広い文脈を扱った。それゆえ本論でいうところの“アムバガイ事件”とは、アムバガイが「タタルの乢の民」によって捕らえられ金朝に送還されて殺害された事件を

中心に、その前後を含めた経緯を含んでいるのである[vii]。この視点の妥当性を暗示するかのように、アムバガイの遺言の残し方だけでなく、“アムバガイ事件”においては不可解な点がいくつかある。そしてそれらは本論の仮説に基づくと理解されうるものとなる。

結論から述べると、アムバガイが息子カダアンではなくクトゥラに遺言を残したのは、タタルの背後にある金朝を後ろ盾にしたクトゥラ勢力の存在を予想し、次のような周到な復讐劇を考えたためである。すなわち、１）自らの死後、裏切者であるクトゥラをカハンに推戴させ、息子カダアンと対タタル戦に行かせる、２）タタルと内通しているのでクトゥラは当然ながら対タタル戦で勲功を立てることはできない、３）力のないクトゥラに代わって、カダアンがクトゥラからカハン位を奪取する、というような筋書きであった。クトゥラは対タタル戦における仇討ちをクトゥラのカハン位継承の条件とされた時点で、クトゥラ政権は成立時点で機能不全に陥っていたはずである。アムバガイは、クトゥラを表向きは立てながらも、実際は窮地に立たせ、クトゥラの後釜に自分の息子カダアンを据えようと企図したということになる。

アムバガイ・カハンがクトゥラに遺言を残した理由のもうひとつは、自分の死後、クトゥラ派と反クトゥラ派（アムバガイ派）に分裂してモンゴル集団が弱体化することを回避したかったからだと考えられる。そのために、敢えてタタルをモンゴル集団の敵に位置づけようとしたのだと推測される。しかし、アムバガイの思いも虚しく、モンゴル集団がクトゥラ派と反クトゥラ派に分裂せざるを得なかったらしいことは、§52 でアムバガイがカハン位についたときの“全モンゴル”が、§57 でクトゥラがカハン位についたときには、“全モンゴル”と“タイチウド”という集団のふたつに分裂していることからうかがえる。アムバガイの仇を討つために結束しなければならない時にも関わらず分裂しているこうした事態は、本論のような仮説を踏まえなければ理解が難しいように思われる。

アムバガイ事件におけるクトゥラ関与の仮説を適用すると、アムバガイの遺言の残し方は変則的だというだけではなく、２．３．で述べた a～e の５つの謎について以下のように説明することができる。

a. 皇帝位の継承パターンからみたアムバガイ･カハンの変則性

アムバガイが短い遺言でモンゴル集団を分裂させずにタタル征伐を行わせ、またそれによって自分を陥れたクトゥラを窮地に追いやり、自分の息子にカハン位を最終的に継がせようとした周到な復讐計画は、この人物の非凡な政治手腕を示しており、ひいてはこの人物の日常的な政治手腕を彷彿とさせるに充分である。このアムバガイの政治的非凡さが、カブル･カハンからアムバガイへの継承の変則性を説明してくれるように思われる。

b. アムバガイ事件とは異質なイェスゲイの婚姻エピソード

アムバガイ事件におけるクトゥラの関与と、それに対するアムバガイの復讐計画、そしてカダアンの対タタル戦の不首尾を考えると首肯される。アムバガイの復讐計画は緻密ではあった

が、誤算があった。それは、自分の息子カダアンの能力であった。クトゥラだけでなく、カダアンも対タタル戦に武勲を立てることができず、モンゴル＝タイチウド集団に権力の空白が生じた。ここに野心的に参入してきたのがイェスゲイだったということになる。拙稿では、イェスゲイのホエルン略奪の背景には、アムバガイ・カハンがタタルに裏切られたという事件によって、正妻がタタル出身者であると政治的に不利であったという状況を指摘していた。すなわち、そこにおいては、イェスゲイの行動に消極的な理由しか見出していなかった。しかし、本論では、アムバガイ事件に関係付けることによって、むしろイェスゲイは積極的にそれを断行するつもりがあったのだと判断できる。

c. イェスゲイと、クトゥラ・カハンやカダアン・タイズとの関係性の不明瞭さ

これについてはクトゥラがアムバガイの裏切り者であったという本論の仮説に従えば理解される。もし、イェスゲイがクトゥラとの関係を叙述されていたとしたら、イェスゲイはクトゥラと共謀してアムバガイを陥れたという汚名を被せられることになってしまうからである。明示的にチンギスを肯定的に描く必要があったと考えられる秘史において、こうしたことは避けられたのであろう。また、イェスゲイとカダアンとの関係も明示的に叙述されていない背景には、イェスゲイがカダアン陣営にも属していなかったことを暗示している。おそらくイェスゲイは、アムバガイの死後、クトゥラの自滅とカダアンの不首尾を見て、集団を分裂させないで、モンゴル＝タイチウド集団のリーダーになろうという野心を抱いたのだと考えられる。

d. アムバガイ事件へのタタルの関与性の不明瞭さ

アムバガイ殺害にクトゥラが関与しているとするならば、アムバガイ事件は、基本的にモンゴル集団内部の権力闘争に起因しているのであって、タタルは無関係ではなくとも、タタルを全面的に悪者とすることは避けられたのではないかと考えられる。「タタル」ではなく、「タタルの乢の民」がアムバガイを金朝に連行していることはこのことと関連しているように思われる。

e. イェスゲイの最終的な政治的位置の不明瞭さ

イェスゲイが政治的にクトゥラ派とも反クトゥラ派（タイチウド）とも距離をおいて、モンゴル＝タイチウド集団のリーダーを狙っていたらしいことは前述の通りである。ただし、アムバガイ事件の範囲で見られる彼の称号には、決してカハンがついていないことに基づくと、イェスゲイは政治的影響力をもっていたかもしれないが、カハンにはならなかった可能性が高いことを暗示している。

４．２．拙論との連続性

秘史で明示的に描かれるアムバガイの殺害事件は、タタル集団がモンゴル集団或いはモンゴ

ル＝タイチウド集団にとって敵対的な集団となる最初の事件として位置づけられている。とはいえ、実は、タタル集団がモンゴル集団／モンゴル＝タイチウド集団にとっての宿敵となる事件としては、秘史において明示的にはこの事件と、もう一つの事件の２つがある。そのもう一つの事件とは、チンギスの父イェスゲイ・バアトルがタタル集団によって毒殺されるという事件である。この２つの事件は、後のチンギス･ハーンによるタタル集団の殲滅に正当性を付与する出来事になった。

だが、タタル集団がモンゴル集団／モンゴル＝タイチウド集団にとっての宿敵となるこの２つの事件をよく見ると、前者のアムバガイの場合は婚姻の文脈における同族の裏切り、後者のイェスゲイの場合は宴会の文脈における姻族の裏切りによってそれぞれ身を滅ぼしている。ここで指摘すべきことは､両者の死がどちらも戦闘という文脈におけるものではないことである。婚姻や宴会という場面における裏切り行為があったということは、モンゴルとタタルとの間には、戦闘といった敵対関係に収斂しえない親密な関係性があったことを逆説的に示している。このように考えると、タタル集団がモンゴル集団の「宿敵」となったのは、アムバガイ殺害そのものに起因するというよりも、内紛（集団の分裂）を避けるためタタルを宿敵にしようとするアムバガイの意志、そしてその遺志を継いだイェスゲイの意志に起因するものだということになる。

本論の仮説の妥当性を傍証する事柄として、本論の考察がこれまでの拙論とも整合性をもっていることを以下に示しておきたい。ここで指摘したいのは、タタルを純粋に敵対集団とみなさない趣向は、拙稿で論じてきた、秘史において非明示的に示されているタタルへの共感と呼応していることである（藤井　2009，2010b，2011a，2011b）。本論で、タタルそのものではなく､微妙にずらした｢タタルの乢の民｣をアムバガイの直接的な裏切者にしているところも、このような秘史の他の部分にも非明示的に示されている対タタル観と呼応している。対タタル観だけでなく、アムバガイ事件におけるイェスゲイの立ち位置の考察は、イェスゲイがアムバガイの死後、ホエルンをメルキト集団から奪う事件の考察をした拙稿とも整合性を持っている（藤井　2010a）。４．２．のｄの箇所で既に述べたので詳細は省くが、イェスゲイはモンゴル＝タイチウド集団のカハンになるべく、消極的にではなく積極的にタタル出身の正妻を斥け非タタル出身のホエルンを正妻に迎えたのである。

４．３．今後の課題

以上の議論によって、アムバガイの死後、イェスゲイが政治的に急浮上している理由をある程度理解できたといえる。｢ある程度｣というのは、クトゥラやカダアンの不首尾だけがイェスゲイの政治的登場を促したわけではないように思われるからである。つまり、イェスゲイには別に積極的な政治的勝算があった可能性もある。政治的勝算のひとつにはケレイトの王罕に対する彼の優位性が関係しているかもしれないが（藤井　2014a：59－63，69－70）[viii]、これについての詳細な考察は今後の課題としたい。

引用文献

≪邦文≫

小沢重男（1984）『元朝秘史全釈（上）』風間書房

栗林均・确精扎布編（2001）『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引、東北アジア研究センター叢書第 4 号，東北アジア研究センター

栗林均編（2009）『「元朝秘史」モンゴル語　漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北アジア研究センター叢書第 33 号，東北大学東北アジア研究センター

藤井麻湖（2001）『伝承の喪失と構造分析の行方―モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』日本エディタースクール出版部

藤井真湖（2009）「チンギス･カンをめぐる伝説の諸相－『チンギス･カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに－」　『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 10 号，pp.41－56 .

藤井真湖（2010a）「『元朝秘史』第 53 節～第 68 節の有機的解釈の試み－“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに－」『言語文化学会論集』第 34 号,pp.167－179.

藤井真湖（2010b）「『元朝秘史』第 268 節におけるイェスイ妃に関する叙述－グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈－」『現代社会研究科研究報告』第 5 号,pp.41－56.

藤井真湖（2011a）「『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察－“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに－」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』6 号，pp.21－41.

藤井真湖（2011b）「『元朝秘史』の地の文における “我々”表現に隠された意図―巻 3 第 110 節～巻 11 第 263 節における一人称複数形についての考察―」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』7 号，pp.45－66.

藤井真湖（2013a）Чингис Хаан Ба Монголын Эзэнт Гүрэн:Түүх,Соёл,Өв (Олон Улсын Эрдэм Шинжилгээний V Хурал 2012.07.24-26. Улаанбаатар хот),Редактор: Д.Шүрхүү,Б.Хүсэл,Иманиши Жүнко, Б.Сэржав, Орчуулгын редактор: Б. Сэржав， Хэвлэлд бэлтгэсэн: А. Сосорбурам, М. Болормаа, pp.112－140.

藤井真湖（2013b）「『元朝秘史』におけるソルカン・シラとジェベ―gelbüre kö’ün＝「語り手」の仮説をもとに―」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 9 号, pp. 17－34.

藤井真湖（2013c）「『元朝秘史』の“モンゴル英湯叙事詩”的研究－現代に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第 15 号,pp.43－70.

藤井真湖（2014a）「『元朝秘史』における anda 概念－王罕・ジャムカ・チンギスの非明示的な三者関係を基に－」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 10 号,47‐72.

藤井真湖（2014b）「『元朝秘史』におけるボルテ夫人事件－繰り返し現れる“略奪”と“奪

還”の諸事件のクライマックスとしてー」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー･コミュニケーション研究科編』第 6 号，pp.39－54.

村上正二（1984〔初版 1970〕）『モンゴル秘史 1　チンギス・カン物語』東洋洋文庫，平凡社

≪蒙文≫

Čeringsodnam,D.（1993）≪Mong**γol**-un ni**γuča tobčiyan**≫**-u orčiγulγa tayilburi,** 民族出版社，北京

Damdinsürüng,Č.（2012[1947]）≪蒙古秘史≫研究丛书（影印版）⑨≫，内蒙古文化出版社.

Гаадамба,Д.（1976）Монголын Нууц Товчоо,Улсын хэвлэлийн газар,Улаанбаатар

≪漢文≫

道润梯步（译著）（1979）≪新译　简注 蒙古秘史≫内蒙古人民出版社

烏蘭（2012）『元朝秘史（校勘本)』中華書局

佚名撰（鮑思陶點校）（2005）『元朝秘史』齊魯書社出版発行

≪欧文≫

Cleaves,F.W.,(1982) The *Secret History of the Mongols Translated and edited by FRANCIS WOODMAN CLEAVES*, Published for the Harvard-Yenching Institute by Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, London, England.

de Rachewiltz, Igor（2004）*The Secret History of the Mongols*, Volume One, BRILL, LEIDEN・BOSTON

注釈

---

i 「乢の民 **ǰüyin_irgen**」を村上正二氏は次のように説明している（村上　1984［1970］: 69)。「『秘史』には「主因亦児堅」という文字でかかれる。この「主」**ǰü～ǰu** が『遼史』『金史』あるいは『元史』に「乢」という特殊な文字で写されたものの原音と見られるが、『黒韃事略』の説明によると、五十人を一隊として編成された、国境防備のための外人傭兵部隊を指すものであった。おそらくは契丹語に由来する語であって、最初は遼朝下で保有を許された王侯貴族の私軍を名ざしたが、次の金朝にはいると、この語は、自国の羈絆の下に置かれた北方遊牧民族から編成した国境守備隊を意味するように使用されて、奚族から出た「咩乢」、タングトから出た「唐古乢」、モンゴル族から出た「萌骨乢」などの多くの乢軍が輩出するようになったらしい。ここに見える「タタル乢」も、又その一つであろう。」村上氏の解釈に基づくと、秘史でのこの乢軍は金朝の国境守備隊を意味することになってしまうように思われる。すると、明示的にはタタルを敵とするエピソードになっているにもかかわらず、タタル集団が全く無関係になってしまうので、ここではその見解を採らなかった。ちなみにラケヴィルツ氏は **ǰüyin** という語は多分契丹語で、動詞***ǰüyi-(＝*ǰüi-)**と出動詞派生名詞の接尾辞**-n** と結合したものだろうとしている。モンゴル文語では **ǰüi-**は「集める、雑多なものから集める」等々の意があるとしている（**de Račhewiltz 2004:301**）。

ii 小沢氏はラケヴィルツ氏のどの文献を引用したのかはこの箇所に記述はないが、おそらく略語表にある I.de.Rachewiltz:The Secret History of the Mongols, Papers on Far Eastern

History 4～26 , 1971～1982 の該当箇所からの引用と考えられる。筆者はこの文献を未見であるが、ラケヴィルツ氏がその後長い年月にわたって解釈を変更した痕が見られないことは2004 年の秘史の訳語が次のようになっていることから看取される（de Rachewiltz,Igor 2004:10-11）。When they were on their way to deliver him to the Altan Qa'an of the Kitat, Ambaqai Qa'an contrived to send a message using as messenger Balaqači, a man of the Besüt. He said to him, 'Speak to Qutula, the middle one of the seven sons of Qabul Qa'an,and of my ten sons speak to Qada'an Taiši.'この訳語についてラケヴィルツ氏は次のようなコメントをつけている（de Rachewiltz,Igor 2004:303）。However, it is worth nothing that Qutula is mentioned first and it is quite clear from the sentence that Balaqači should speak to Qada'an Taiši *after* having spoken to Qutula.仮にラケヴィルツ氏の主張を容認したとしても、ラケヴィルツ氏がクトゥラに最初に言及されているのは意味のないことだと主張していることには無理があろうと思われる。

iii アムバガイの遺言の伝え方についてはともかく、継承ラインの違いを意識している点ではクリーヴス氏やラケヴィルツ氏の注釈のほうが小沢氏のそれよりも筆者と共有しているものが多いように思われる。クリーヴス氏を引用しておくと次のようになる(Cleaves 1982:11)。Ambaγai Qahan, although not in the line of succession, was named by Qabul as his successor(§52)。He, in　turn, anticipating the election of which we read below(§57), designated in the manner herein related two candidates: Qutula, a son of Qabul Qahan, and Qada'an Taisi, one of his own sons.With the eventual election of Qutula(§57)the line of succession reverted to the family of Qabul Qahan.ラケヴィルツ氏は次のように書いている（de Rachewiltz 2004:302-303）。I understand the passage to mean that he was merely used as such by Ambaqai in order to convey his last instructions to Qutula and Qada'an Taiši. Regarding the choice of these two personages, we have seen how with Ambaqai political power had passed from the line of Bai Šingqor Doqšin, Tumbinai Sečen and Qabul Qan to that of Čaraqai Ligqu and Senggüm Bilge,i.e. to the Tayiči'ut clan. By sending his final instructions to both Qutula and Qada'an Taiši, and by referring to their(i.e.to one of them)becoming the supreme leader, Ambaqai left open his succession to either line. モンゴル語のテキストでも、小沢氏の言うとおり、ダムディンスレン氏の翻訳でも、ラケヴィルツ氏と同様の解釈をしていることが観察されるし（Damdinsürüng　2012[1947]：31）、ガーダンバ氏のキリル文字版の現代語訳でも同様である（Гаадамба　1976：28）。ツェレンソドノム氏のウイグル式蒙古文字テキストにおいては、小沢氏の問題としている「舌論」を切り捨ててはいないもの、アムバガイがバラガチを派遣するさいに言う台詞の中に組み込まれているため、どのように理解すればよいのかがわからない（Čeringsodnam　1993：45－46）。漢語による訳註をみると、遺言はクトゥラとカダアン両者に同時に伝えているようになっていることが多いらしい。たとえば、（道润梯步　1979：24）、（佚名撰［鮑思陶點校］2005：22）を参照。なお、最近出版された烏蘭氏の校勘本にも当該箇所については校勘対象にはなっていない（烏欄　2012：17）。

iv ただしここでは各語尾等々は考慮せず、称号にのみ着目したことを断っておく。

v ここで 05:10:01 のひとつは、2 語が 2 行にわたっているので実際は 05:10:01-05:10:02(§150)と記すべきようなものである。

vi この人名 ǰali_Buqa の頭文字の ǰ は大文字であるが、ここでは小文字で示したことを断っておく。

vii このような広い設定の仕方は、筆者の依拠している方法論であるロラン・バルトのナラトロジーの手法における機能体分析と密接な関連がある。ロラン・バルトのナラトロジーを英雄叙事詩に援用する方法については、すでに藤井（2001）で詳述しているので、ここでは省略する（藤井　2001：89 - 92）。

viii この観点から論じるさいには、アムバガイ事件で登場するイェスゲイの称号と、ケレイト

の王罕との関係が述べられる箇所でのイェスゲイの称号とが異なっていることも関連付けられる必要があるだろう。